



「あざ」ができるのはなぜ

ぶつけてできるのは、「あざ」とはいわない

よく、足など体のどこかをぶつけたときに、体がむらさき色になると「あざができた」といいますが、このように、ぶつけたときにだけ急にできて、しばらくすると消えてしまうものは、正しくは、あざとはいいません。

「あざ」ができるのはメラニン色素のせい

「あざ」とは、長い間、皮膚の上にあって、消えないものをいいます。これには、うすい茶色や赤みがあったもの、黒いものなど、いろいろな色のものがあります。

このようなあざができる原因は、いくつか考えられますが、いちばん多いのは、皮膚のメラニン色素という、黒いつぶをつくる細胞が、うまくはたらかなくなってしまうことです。

ほくろ・しみ・そばかすなども、同じようにメラニン色素が原因で、皮膚にできるものですが、そのままにしておいても、体には何の影響もないものばかりです。

しかし、中には、専門のお医者さんの、手当てを必要とするものもありますし、がんになってしまうものもあります。小さなあざはそれほど心配ありませんが、大きすぎるあざの場合は、お医者さんに相談したほうがいいでしょう。（監修・保志 宏）

